

戦前期温泉地間競争と交通網の革新（上）

笠井雅直

目次

- 一 課題の設定
- 二 第一次大戦以降の温泉観光ブーム
- 三 鉄道省のモータリゼーション・不況への対応と観光開発
- 四 鉄道資本・阪神急行電鉄の宝塚モデルの生成（以上、本号）
- 五 東京圏をめぐる温泉地間競争の推移
- 六 大阪・神戸圏をめぐる温泉地間競争の推移
おわりに

一 課題の設定

本稿は、第一次大戦以降に本格化する観光旅行・温泉観光のブームの歴史的な特徴とその背景について明らかにすることを課題とする。第一次大戦以降、特に大正末・昭和恐慌期にあっても「ブーム」は持続・拡大し、その後の戦時下においても持続することは、これまでの研究によって、個別の事例を通してではあるが、明らかにしたところである。とはいえ、その個別事例の全体的な位置づけ、あるいはその歴史的な脈絡については未解明であった。研究史においても、昭和恐慌期から戦時期における温泉観光の推移については、課題の設定それ自体が今後の課題となっている。もちろん、戦前における観光の歴史的な推移については、白幡洋三郎『旅行ノススメ』（中公新書、1996年）において手際よくまとめられてはいるが、温泉観光という視点を設定することで、観光地・温泉地の動向を含めた経済史・経営史的なアプローチによって時代的な構成とその意味が明らかになるものと考えられる。本稿は、温泉観光という限定の下ではあるが、この課題に取り組もうとするものである¹⁾。

第一次大戦以降の温泉観光の特徴は、温泉地をめぐる競争が、交通網の革新などによって、全国レベルでの地域間競争として展開するに至ったことであり、それによって、観光ブームを牽引する要素の一つとして温泉観光を浮かび上がらせたのであった。さらに、全体的な動向を主導した要因としては、国策として推進された外貨獲得産業としての観光の推進であり、そして乗客数の低下傾向に直面していた鉄道省による交通網の整備・革新と独自の観光地設定を介した観光開発の推進であった。

二 第一次大戦以降の温泉観光ブーム

まず、第一次大戦以降の温泉観光のブームについて見よう。温泉浴客の推移については、第一次大戦前後と戦時下の昭和14年度の数字によってみれば、大正9年までの10年間の平均が、16,806,911人であり²⁾、昭和14年度が、26,006,158人であった³⁾。全国的には、一千六百万人台から二千六百万人台へとほぼ一千万人の増加となっている。激増と言っていであらう。

こうした温泉浴客の増加、温泉観光のブームについて窺い知ることのできるものとして、1928(昭和3)年6月に、文部省東京博物館において開催された温泉展覧会がある。その意図するところは、「温泉は観ようによりては産業にもあらねば科学にもあらずと雖も、また一面の観察によれば、科学の産物にして而も本邦の誇りと称すべきもの」であり、日本が「世界の温泉国と称する」ことができるほどではあるが、現実には温泉が「随所に存在したるがために之れを以て単なる遊蕩慰安の場所として時に或いは疾病治療の場所たるの外科学的には殆ど顧みられざるのありさまなりしは寧ろ異なる現象なり」と温泉観光ブームに警鐘をならしているかのようであった。

展覧会の開催目的は、温泉を「科学的に研究し科学的に利用する」ことであった。そのため、展覧会は、「本邦温泉の成因、其分布、其由来、其学術的効果、医治効能、温泉の副産物、等を網羅し、加ふるに各地温泉場の一瞥に値する資料を集め」て開催されたが、「数日の短き展覧会も意外なる効果を収め」たのであり、その結果「温泉業者に採りても温泉利用者に対しても科学的観察の上に少なからざる利益を与えたるを信ずる」としたのであった。さらに、温泉観光ブームによって作りあげられた、「温泉の徒らなる遊蕩場にあらざることを一般社会に徹底せしむる」ためには、今後さらに「全国温泉場主の大聯盟によりて適當の大舞台を用い」て科学的に提示する必要を強調している⁴⁾。

温泉展覧会の展示は、温泉発達史料の部、温泉科学参考品の部、温泉旅行の部、追加出品の部、活動写真から構成されていた。ここでは、温泉旅行の部と追加出品の部に展示物として温泉場の写真や温泉案内などを提供した温泉地などが知られることから、その内容について、少し長くなるが挙げておこう。

温泉旅行の部

- | | |
|----------------------------|--------------|
| 一、各地温泉場の写真、ポスター其他多数 | 鉄道省 |
| 一、関東地方温泉地交通図(時間及賃金) | 日本旅行協会 |
| 一、花巻温泉実景油絵、同平面図、同部分写真、案内記等 | 岩手県 株式会社花巻温泉 |
| 一、須川温泉案内図写真等 | 岩手県西磐井郡巖美村 |
| 一、五色温泉写真 | 山形県五色温泉宗川旅館 |
| 一、高湯温泉写真其他印刷物 | 山形県高湯温泉青年会 |
| 一、温泉雑誌 | 山形県温泉組合聯合会 |
| 一、湯の湖写真、湯の花、其他印刷物 | 日光湯本温泉組合 |
| 一、飯坂及鳴子温泉案内書 | 福島 石塚直太郎 |

戦前期温泉地間競争と交通網の革新（上）

一、浴客統計図表，沿革誌，風景写真等	草津鉱泉取締所
一、伊香保温泉気象図表，写真，案内記，湯の花等	伊香保鉱泉場組合取締所
一、磯部鉱泉案内額面，固形塩分，湯の花，鉱泉源泉等	磯部温泉組合
一、笹の湯，湯島，湯宿，法師各温泉写真等	群馬県新治村温泉組合
一、地獄谷噴泉写真，案内記等	長野県平穩村役場
一、諏訪温泉風景（水彩画）	伊木忠愛氏
一、黒部峡谷諸温泉写真，鳥瞰図等	黒部鉄道株式会社
一、箱根付近の案内図	富士屋自動車株式会社
一、加茂真淵詠箱根山歌，新田義則碑，印刷物数種，蛇骨標本等	澤田和義氏
一、熱海温泉写真，温泉井堀各地層岩石標本，熱タンポ等	熱海温泉組合
一、船原温泉の絵画写真等	伊豆船原ホテル
一、伊豆峰温泉写真，地図，結晶物等	東京 田島吉兵衛氏
一、下加茂温泉写真，温泉沈殿物其他	伊豆下加茂温泉組合
一、地熱利用温室栽培写真	伊豆下加茂瑞豊園
一、城崎温泉写真其他印刷物	但馬城崎町役場
一、ラヂウム吸入説明図，写真等	三朝温泉旅館組合
一、道後温泉写真，温泉誌，伊予の湯等	道後温泉事務所
一、別府市水道小誌，写真，温泉案内	別府市役所
一、湯の花製造所，地熱発電所，噴気吸入其他の写真，鉄輪蒸風呂絵図等	大分県朝日村役場
一、別府行航路紅丸模型，別府及南紀航路写真等	大阪商船株式会社
一、肥前雲仙温泉写真	日本郵船株式会社
一、長崎県小浜温泉写真，温泉案内	長崎県 本多親宗氏
一、世界各国旅行案内印刷物外国温泉地ポスター	ジャパン，ツーリストビューロー
一、北米黄石公園地質帖，地形図，案内帖，独逸バーデンバーデン，イスバーデン案内記	大井上義近氏
一、外国温泉アルバム其他	東京 衣笠 豊氏
一、硬水石鹼	日東石鹼株式会社
一、植物図鑑及動物図鑑	北隆館
一、鉱泉に関する舞台面（写真印刷）	中村 敬氏
一、布引炭酸水，ダイヤモンド印オレンジ，レモン，シトロン，サーダー等	株式会社布引鉱泉所

（表記ミスは訂正した。以下，同様）⁵⁾

さらに，追加出品の部，活動写真映画の部について温泉地からのものを摘記すれば，次の通りである。

追加出品の部

- | | |
|---------------------|-----------------|
| 一、温泉結晶，案内書，写真 | 和倉温泉組合・和倉温泉合資会社 |
| 一、あられ石（天然記念物） | 長野県平村役場 |
| 一、写真及毒魚絵図 | 伊東温泉宿屋組合 |
| 一、温泉案内，絵はがき等 | 肥前武雄町役場 |
| 一、瀬波噴泉写真額 | 新潟県瀬波温泉組合 |
| 一、砂湯写真，中学校寄宿舎内浴場写真等 | 鹿児島県指宿村役場 |
| 一、高山植物標本等 | 長野県鹿澤組合 |
| 一、案内記 | 栃木県那須温泉組合 |
| 一、案内記，絵はがき | 山形県赤湯温泉組合 |
| 一、写真 | 長野県中房温泉 |
| 一、箱根温泉写真及模型 | 箱根振興会 |

活動写真映画の部

- | | |
|-------------|----------|
| 一、箱根温泉四巻 | 箱根振興会 |
| 一、花巻温泉六巻 | 花巻温泉 |
| 一、田植踊一卷 | 花巻温泉 |
| 一、雲仙温泉二巻 | 日本郵船株式会社 |
| 一、伊東の温泉廻り四巻 | 伊東温泉組合 |
| 一、奥伊豆の温泉一卷 | 伊豆峰温泉 |

6)

温泉地としては、岩手県の花巻温泉，福島県の飯坂温泉，群馬・栃木の温泉，熱海や伊豆の温泉，山陰の三朝温泉，長野県の温泉，そして九州の別府や雲仙の温泉地など，全国に及んでいる。提供団体も温泉組合や旅館組合，そして市町村役場，温泉旅館会社など様々となっている。株式会社花巻温泉のように，温泉遊園地として1923（大正12）年に開設された新興の温泉地は，上の資料の限りでも実景油絵，写真，そして活動写真映画などの当時のあらゆる媒体を活用して宣伝に励んでいたことが改めて知られよう⁷⁾。既に全国的な温泉地間の競争を前提として，各温泉地がそれぞれ特徴的な遊覧分野を押し出していたのである。

さらに鉄道省が，率先して出品しているだけでなく，大阪商船，日本郵船という交通資本・企業が別府や雲仙の温泉地の宣伝にも関連していることも注目される。後に見るように，海路による観光開発も温泉地間競争の一場面であった。なお，資料の石塚直太郎は、『飯坂湯野温泉』（飯坂湯野温泉案内所，昭和2年）の著者であり，経歴としては「研究家として天皇御陵の発見者」であり，「山陰水力，但馬電力，保坂鉄工所，月島，平井両鉄工所，千代田印刷，日本名物商工，湊鉄道，武相電軌，早川組等の」役員などを歴任していたが，当時の飯坂町，湯野村当局や温泉旅館の依頼によって編纂作業に携わっていた⁸⁾。鉄道省や鉄道資本・企業の手による各種案内だけでなく，田山花袋の『温泉めぐり』（博文館，大正7年）を先駆けとする各地の温泉旅行案内

書の執筆者たちが広く登場したのもこの時期であった。

温泉地の宣伝が組織的に行われるのは、日本温泉協会が設立される1929（昭和4）年以降のことであろう。「温泉地の改善、発達を目的とする」⁹⁾日本温泉協会の設立は、「内務省、鉄道省、ビューロー [ジャパン・ツーリスト・ビューロー、以下、同様] 及日本の温泉医学の大家などが発起人となり」、昭和4年11月に「温泉協会創立懇話会」を開催したことに始まる。同月「温泉業代表者の同意を得」て、「昭和4年12月4日東京鉄道倶楽部に鉄道省、東京鉄道局、内務省、ビューロー有志、発起人及東京鉄道局管内各温泉組合、温泉旅館組合代表者が参集し、会則を議定し更に役員を選挙して」設立を見たのであった。内務省はともかくとして、鉄道省、東京鉄道局によって、日本温泉協会の設立は主導されたのであった。関東支部が同時に設立され、次いで、中部支部が昭和5年6月に、東北支部と北海道支部が同年7月に、西部支部が同年8月に、関西支部が同年9月に、そして、満州支部が同年12月に設立される。日本温泉協会のエリアは、日本全国だけでなく、満州にまでおよんでいたのであった¹⁰⁾。

政府・鉄道省が観光開発を推進すべく設立したものとしては、1930（昭和5）年4月に、鉄道省内に設立された国際観光局がある。外貨獲得の観点からのものであった¹¹⁾。国際観光局の活動としては、「外客誘致に関する施設の連絡及統一」、あるいは「外客誘致及斡旋に関する根本方針」の策定にあった。具体的には、海外に配布する印刷物等の発行の様な集客策だけでなく、「外国人に対する宿泊施設の充実改善のため市町村の如き公共団体が設立するホテルには、大蔵省より預金部の低利資金を融通する途を開」くという活動もあった。蒲郡ホテル、上高地ホテル、琵琶湖ホテル、雲仙ホテル、唐津シーサイドホテル、河口湖ホテルなどがそれであった¹²⁾。外客誘致に関連しての温泉の位置づけについて、ジャパン・ツーリスト・ビューロー幹事の高久甚之助は、次のように述べている。

……外客誘致に重要な目標となるものは温泉です。この温泉は数に於きましても、又性質におきましても、種類におきましても世界に比類がない……そこでこの温泉の開発と云うことにつきましても、段々其の必要を認められて参りまして…… [ドイツのバーデンバーデンの温泉設備に学んで] ……各方面とも適当なる計画を実現せられて、多数の外人を誘致し、其の人々が永くかつ楽しく滞在できるようにしなければならぬと思うのであります¹³⁾。

温泉観光も外貨獲得に貢献すべく各種設備の充実の必要を強調している。

さらに、政府として観光開発に具体的に取り組んだものとして、1931（昭和6）年に制定された国立公園法、そして1934（昭和9）年3月の国立公園の指定をあげなければならないであろう。観光旅行ブームを促進したものとしての国立公園の設定についてみると、日本政府は、1921（大正10）年より国立公園の調査を始めて、1931（昭和6）年に国立公園法を制定し、1934（昭和9）年3月に国立公園の指定が行われたのであるが、その発端は、「大正十年第四十四議会に於て、富士山を明治記念公園と為すの請願が現れ、同時に日光国立公園に関する質問があり〔既に、明治四十四年第二十八回帝国議会に日光ヲ帝国公園トスルノ請願が提出されていた〕、やがて政府

に於てもこれが調査の必要を認むることとなり「日本アルプス上高地を手始めに、白馬山、雲仙、阿蘇、日光の各候補地を実地に調査」したのであった。政府による引き続きの調査によって「昭和三年度に至るまでに、阿蘇、登別、大沼、十和田、磐梯及吾妻、日光、富士、上高地、白馬、立山、大台ヶ原、及大峰山、大山、屋島及寒霞溪、阿蘇、雲仙、霧島等十六候補地全部に亘る一通りの調査を完了した」。最終的には、「大雪山を新たに候補地として追加」して、12か所を選定した¹⁴⁾。

この過程において興味深いことは、国立公園として設定された観光地において温泉地の確認が行われていることであった。つまり

日本国立公園風景の一特色として温泉の豊富なることを付加しておくことも忘れてはなるまい。火山国であるから温泉が伴うのであるが、十二公園中にて、温泉のないのは大山と瀬戸内海のみである。富士は温泉を欠くも箱根で十分補っている。そして九州と北海道における国立公園は最も豊富であって、此外十和田、日光、日本アルプス等にも誇るに足るものがある¹⁵⁾。

実際、「国立公園内ノ温泉」が案内されている。具体的には、阿寒国立公園には、川湯温泉（北海道川上郡弟子屈村）ほか7か所、大雪山国立公園には、層雲峡温泉（北海道上川郡上川村）ほか8か所、十和田国立公園には、田代温泉（青森県東津軽郡浜館村）ほか6か所、日光国立公園には、日光温泉（栃木県上都賀郡日光町）ほか7か所、富士国立公園（箱根）には、湯本温泉（神奈川県足柄上郡湯本村）ほか12か所、日本アルプス国立公園には、蓮華温泉（新潟県西頸城郡小瀧村）ほか17か所、吉野及熊野国立公園には、勝浦温泉（和歌山県東牟婁郡勝浦町）、阿蘇国立公園には、垂玉温泉（熊本県阿蘇郡長陽村）ほか6か所、雲仙国立公園には、雲仙温泉（長崎県南高来郡小浜町）、霧島国立公園には、丸尾温泉（鹿児島県始良郡牧園村）ほか10か所となっている¹⁶⁾。自然景観と併せて、温泉観光が重要な柱となっていることが知られる。

このことは、鉄道省が発売を開始した「遊覧券」（発売は、ジャパン・ツーリスト・ビューローに委託）の内容によっても知られる。後に見るように、1925（大正14）年に発売が開始されるのであるが、遊覧券の種類としては、「香取・鹿島廻り」「銚子・香取・鹿島廻り」「霞ヶ浦・香取・鹿島廻り」「外房廻り」「富士五湖廻り」「富士五湖廻り・及身延詣で」「富士川べり經由身延詣で」「富士山麓廻り」「筑波山廻り」「箱根廻り」「箱根越え」「箱根尾根越え」「富士登山廻遊」「上州温泉廻り」「伊豆温泉廻り」「伊豆半島横断廻遊」「伊豆半島縦断廻遊」「東伊豆温泉廻り」「西伊豆温泉廻り」（昭和3年5月現在）があった。当初は東京近辺の房総方面、富士山、箱根、伊豆半島方面に限定されていたようであるが¹⁷⁾、後の、昭和8年頃には、「上州温泉廻り」「箱根廻り」「伊豆半島及大島廻り」「富士五湖廻り」「信越北陸温泉廻り」「伊勢紀州大和廻り」「天の橋立、城崎めぐり」「四国遊覧券」「九州遊覧券」「台湾遊覧券」「東亜遊覧券」というように¹⁸⁾、より広域に設定された観光遊覧旅行となっていることが知られよう。温泉地の遊覧旅行も前面に出ているものと言えよう。

三 鉄道省のモータリゼーション・不況への対応と観光開発

政府・鉄道省（大正9年に、鉄道院から鉄道省となる）が観光開発に乗り出すに至った背景について見ておこう。第一次大戦以前の1913（大正2）年3月には、「鉄道院に於いて団体旅客運賃を時季に応じ割引率に等差を付し一定時間に輻輳する団体輸送の調和を計る」というように、混雑回避に際して、年間を通しての乗客確保策がとられていたが、第一次大戦期の1918（大正7）年3月には「鉄道院に於いて普通団体旅客に対する割引を停止す」というように¹⁹⁾、乗客を捌ききれない状況があったことが知られる。具体的に見れば、大正8年度にあっても、「本年度ニ於ケル運輸ノ状況ハ比年財界ノ異常ナル好況ニ伴ヒ稀有ノ盛況ヲ呈シ前年同様旅客ノ誘致ヲ目的トスル各種運賃ノ割引其他普通団体旅客ノ取扱ヲ制限或ハ停止シ極力輸送ノ調節」を行うとあった。他方、民間の鉄道資本である「地方鉄道及軌道ハ輓近地方産業ノ勃興ニ伴ヒ長足ノ進歩発展ヲ遂ケ」ていた²⁰⁾。鉄道網の整備が進展したことが窺われよう。

鉄道院としても、交通網の充実が焦眉の急であった。この時期、鉄道院は、1919（大正8）年7月に「鉄道電化の大方針を決す」とともに、同年8月には「東京・下関間に三等急行列車一往復を新設」するなどの対応を見せる。大戦期のブームに対応するとともに、広域化しつつある観光ブームにも対応しようとしたのであった。そして、1920（大正9）年10月には「鉄道院に於いて普通団体旅客に対する割引を復活す」る²¹⁾。

さらに、大正10年度には、「旅客貨物ノ趨勢ニ鑑ミ列車増発及運転時間短縮ノ必要ヲ認メ尚新線ノ開業、線路改良工事ノ竣工大型機関車及電気機関車ノ増補ニ伴ヒ列車運転上ノ施設ニ改良ヲ加ヘタル〔とともに〕……夜行急行列車ノ増発新設〔により〕……山陽線及中央線ニ於ケル夜行列車ノ用客夥シク増加シタル為〔に〕……京都下関間飯田町長野間及長野名古屋間ニ各一往復ノ夜行旅客列車ヲ増発セリ」²²⁾とあるように、夜行列車・長距離直通運行や路線の電化を推進することで列車増発と時間の短縮を図るのであった。交通網の整備に邁進したのであった。

さらに、大正14年度には、「……観桜、散策其ノ他学生団体ノ乗車等旅客運輸ノ殷賑ヲ極メ……学生ノ修学旅行、郊外散策ノ行楽旅客ノ出遊ト相俟ツテ相当ノ人出〔となったことで〕……此ノ機会ニ於テ名勝、遊覧地其ノ他多数旅客ノ集合スベキ地方ニ対シ割引乗車券ニ依ル臨時列車ヲ運転シ旅客ノ負担ヲ軽減スルト共ニ一面旅客誘致ノ策ヲ講シタル……」²³⁾とあるように、広域化した遊覧旅行の旅客の増加に対応すべく、割引乗車券の発行や臨時列車の運行を推進する。対応して、1925（大正14）年10月には、「鉄道省……鉄道乗車券・汽船券・自動車券・宿泊券を包含する遊覧券をジャパン・ツーリスト・ビューローをして代理発売」するに至った²⁴⁾。

しかし、日本経済における不況の深刻化は、鉄道省においても認識するところとなる。具体的には、昭和元年度において「財界ハ依然不況ナリシ為運輸成績モ不振ヲ持續シ殊ニ下半期ニ至リ漸次深刻ヲ加フル折柄……近時自動車ノ発達ニ伴ヒ「ガソリン」ノ需要増加シ……近距離運送ハ自動車便ニ移リタルトニ因リ……」とある²⁵⁾。景気の後退だけでなく、自動車の普及による鉄道への影響があらわれてきたのであった。これに対して、鉄道省は、昭和5年度には、「……前年度ニ比較スルニ……収入ニ在リテハ旅客……貨物……孰レモ減少セリ……昭和五年十二月二十日

ヨリ岡崎多治見間（岡多線）……及瀬戸記念橋高蔵寺間（高蔵寺線）……ノ区間ニ於テ省営自動車ノ営業ヲ開始シタ……」²⁶⁾という様に、鉄道省がみずから、自動車・バス事業に乗り出すに至る。

その後の昭和8年度には、ようやく「……前年度ニ比較スルニ……収入ニ在リテモ旅客……貨物……孰レモ増加」²⁷⁾するに至る。鉄道省の1日平均旅客輸送人員の推移でみると、昭和元年の2,028,311人を100として、見れば、昭和2年、107、昭和3年、114、昭和4年、117、昭和5年、111、昭和6年、106、昭和7年、105、昭和8年、114、昭和9年、123、昭和10年、133、昭和11年、143、昭和12年、156、昭和13年、182というように²⁸⁾、昭和8年以降において鉄道省の乗客数が増勢に転じたものとする事ができよう。この回復には、以上で見た、鉄道省による観光開発に対応した、鉄道網の整備による夜行列車・長距離直通列車、臨時列車の運行や遊覧券を軸とした各種の割引乗車券の発行があったとすべきであろう。

四 鉄道資本・阪神急行電鉄の宝塚モデルの生成

鉄道省、ジャパン・ツーリスト・ビューローの乗客確保策としての観光開発と交通網の整備について、見てきたが、他方、民間の交通資本・企業による観光開発、温泉観光の企業経営への取り込みが進展したのも、この時期であった。温泉を軸とした観光開発の先駆けとしては、研究史上、阪神急行電鉄（当初は、箕面有馬電気軌道）の小林一三によって推進された、宝塚劇場ほかの施設の建設による新たな温泉地としての宝塚新温泉が知られており、電鉄資本としての乗客確保策として、いわゆる宝塚モデルとして定説化している²⁹⁾。あるいは、宝塚新温泉の開設も鉄道資本・企業による沿線開発の一環として、施設の一つとして理解されているかのようである³⁰⁾。

すでに見たように、第一次大戦前後、そして昭和恐慌とその後の戦時期にかけての時期は、一つの観光ブームの時代であり、ブームへの対応を迫られた時期のビジネス・モデルとして、宝塚モデルを理解すべきであろう。ここでは「鉄道と観光」あるいは、「鉄道と温泉」という観点から、特に温泉観光に限定してではあるが、宝塚新温泉の開設以降の、同温泉への集客戦略の推移を見ることで、戦前におけるいわゆる宝塚モデルが観光ブームとどのような関連にあったのかについてふれておこう。もちろん、温泉地としての宝塚温泉、関連する有馬温泉を含む地域間競争の在り様については後にみることになるが。

宝塚温泉の開業は、1892（明治25）年であり、新興の温泉地であった。当初は、武庫山鉱泉とも言われていた。「分銅屋、榊屋、弁天楼、小宝屋の四大楼は、昼夜股賑を極めた」という。「明治三十八年頃より再び隆盛となり、宝塚温泉の名は遠近に伝播し、治療に保養に来浴するもの多く、日々幾千人を以て数ふるに至」ったという。宝塚新温泉の開設以降の1914（大正3）年の8月中の浴客は、新旧の宝塚温泉あわせて6万人とある。うち箕面有馬電気軌道と当時の阪鶴線によるものが3万2千人であったという³¹⁾。年間にすれば、70万人以上となる。大正3年の宝塚劇場の集客数（「宝塚新温泉入場人員」）は、25万人弱であり、過半にはっていない³²⁾。同時期の有馬温泉は、1913（大正2）年には、7月中が5,735人、8月中が12,423人、9月中が3,654人であり³³⁾、年間の最盛期の時期でも、宝塚新旧温泉の約五分の一の集客であった。箕面有馬電気軌

道が「新浴場」に「工費約二十万円を費」したその効果大とすることができよう。大正4年当時は、併せて「武庫川に架した宝迎橋、梅林、塩尾寺、清叢神等見物するに値する」として、宝塚温泉の見所としている³⁴⁾。同年、対抗して有馬温泉を終点とする神戸有馬鉄道も開通しており³⁵⁾、観光開発をめぐる競争が激化していたことが知られる。この後、第一次大戦のブームもあって、宝塚「新温泉は阪神急行電鉄株式会社の経営で其規模壮大で」「建物総面積約二千坪、動物園があり、パラダイス、レセプションホール、歌劇場等がある。殊に歌劇は宝塚の名物として知られ、京阪から日々数千人の看客がある」という活況を見せていた³⁶⁾。その後、宝塚新温泉は、「歌劇の宝塚」とも言われ³⁷⁾、「所謂遊園温泉の元祖であると同時にその模範的なもの」として、「家族づれ一日もしくは半日の遊覧には最も好適」とされてるに至る³⁸⁾。

一方、有馬温泉も「六甲山の西北麓にある絵のような温泉場」として³⁹⁾、六甲山が「広大なゴルフリンク」として、「冬はゴルフ場が直ちにスキー場と変って、阪神近郊唯一のスキー場としてスキー・ファンが集まる」ことや、「スケートに適当な小湖水も五六箇所」などもあることから、六甲山「を越えて有馬温泉に出ること」が「日曜一日の好トリップとして最も盛んに行なわれてい」た⁴⁰⁾。「六甲越えといってこの山を越えて、有馬温泉へ行く人が多い」とも言われる⁴¹⁾。

これに対して、阪神急行電鉄側も、「近時は宝塚橋畔に堂々たる豪華な五層の建物が出来、中には浴場の外に客室、食堂、ピーアホール等、宛ら大ホテルの観を呈する」というように設備拡張をはかる⁴²⁾。具体的には、1923（大正12）年の大火災を機として、当初の「浴場を開設し其余興として少女歌劇を創設」した段階から、「パラダイス、大食堂、大劇場、第二食堂、及納涼台等」を建設し、「又劇場の拡大に伴い歌劇団を拡張して、従来の花組、月組、更に雪組を加え、大、中、小三劇場に於て同時開演」するに至っていた⁴³⁾。併せて、前後する「西宝線の竣功〔1922年〕により神戸よりの来遊至便となりて画期的に入場客激増」したのであった⁴⁴⁾。1934（昭和9）年には「キネマ館」を併設することで「東洋第一の民衆娯楽場」と言われるに至った⁴⁵⁾。

阪神急行電鉄においては、有馬温泉に対しては、「宝塚より六甲越の直通自動車もあり、「有馬温泉迄自動車四十分、六甲山にも登山自動車の便が」あった⁴⁶⁾。有馬温泉に対して「宝塚から乗合自動車の便」ができたことが注目される⁴⁷⁾。昭和9年頃には、阪神急行電鉄が有馬温泉までの交通路を案内して「有馬への第一順路 大阪、神戸より宝塚までは先ず阪急電車を利用し宝塚よりバスに乗り換えなば三十分余りで有馬温泉に達す。これが最も便利な順路です」とあった⁴⁸⁾。電鉄、バス、ロープウェイの連携の実現によって、六甲山周辺は「事実上の六甲有馬公園の出現」と言われるまでになった⁴⁹⁾。写真1「六甲・有馬・宝塚廻遊」を参照されたい。

いずれにしても、1928（昭和3）年に、「神戸湊川一有馬温泉間に神戸有馬電気鉄道が開通し、六甲山系に遮られていた有馬町や三田町などの北摂の地域が、神戸を經由して大阪方面や西の山陽方面と結ばれる」に至る。この1928（昭和3）年の「裏六甲ドライブウエーの開通にはじまる六甲山の開発と相まって、従来の湯治というより、保養と遊覧のために有馬を訪れる人々が増えていく」こととなる⁵⁰⁾。

とすれば、阪神急行電鉄の宝塚温泉への集客も、宝塚劇場効果も、六甲山・有馬温泉を範囲とする広域化した遊覧観光と連携することを余儀なくされ、むしろ進んで遊覧観光を推進したこと

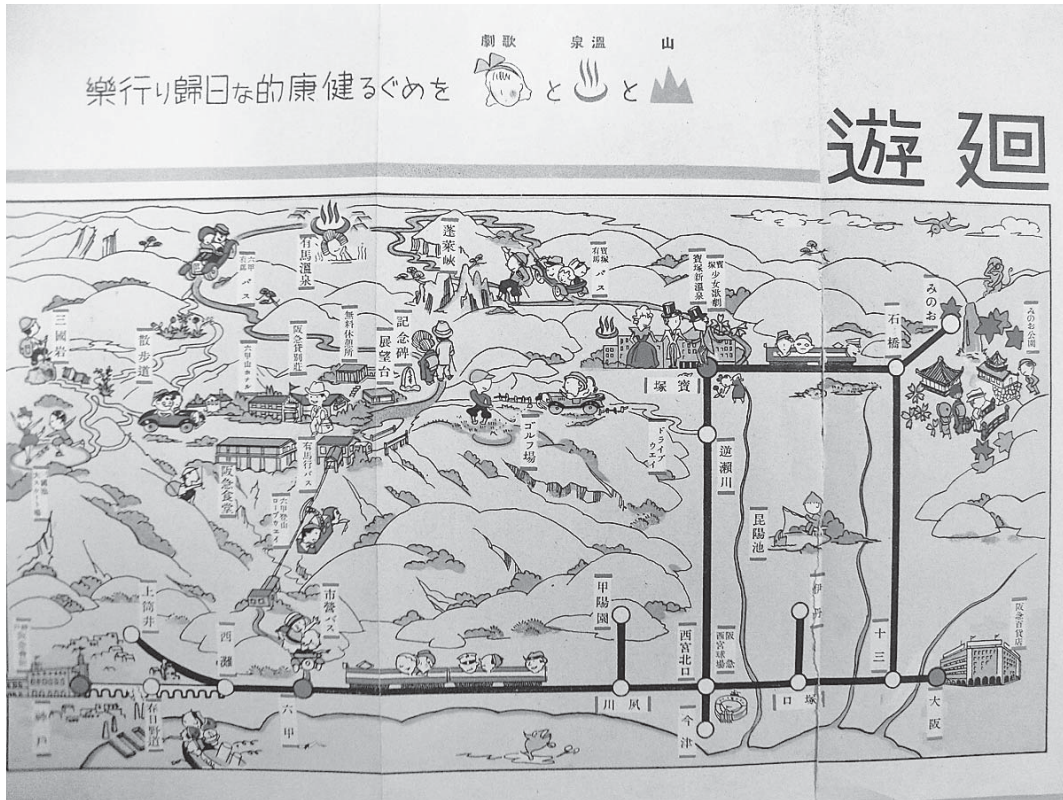


写真1 六甲・有馬・宝塚廻遊

で時代に対応したとすることができよう。以下で見ると、遊覧型の温泉観光がこの時期の温泉地間競争の主戦場であり、各地に特徴的な遊覧の登場が温泉地への集客を、戦時期にあっても増加させたものであった。

注

- 1) 笠井雅直「戦前の花巻温泉—観光開発から温泉報国へ—」富士大学地域経済文化研究所『研究年報』第5号、1997年を参照。必ずしも、経済史・経営史のアプローチとは言えないが、観光というカテゴリーからする関連文献については、江口信清ほか編『観光研究レファレンスデータベース』ナカニシヤ出版、2011年を参照。経済史・経営史のアプローチの最近のものとしては、市川文彦・鶴田雅昭編『観光の経営史—ツーリズム・ビジネスとホスピタリティ・ビジネス—』関西学院大学出版会、2009年、永江雅和「近代日本の旅と旅行産業」専修大学人文科学研究センター編『人は何を旅して来たか』専修大学出版局、2009年、大会報告「観光と鉄道」要旨『鉄道史学』第29号、2011年、市川文彦・鶴田雅昭『観光学入門』日本経済評論社、2012年、そして、大阪府立大学観光産業戦略研究所ほか編『熱き男たちの鉄道物語—関西の鉄道草創期にみる栄光と挫折—』株式会社ブレンセンター、2012年がある。なお、本稿は、鉄道史学会第28回大会（於、跡見学園女子大学、2011年11月14日）の、共通論題「観光と鉄道」の報告をもとにしたものである。準備に際し

戦前期温泉地間競争と交通網の革新（上）

て、私的な研究会でもんでいただいた鈴木純義（名城大学）、小松田儀貞（秋田県立大学）、武井安彦（鎌倉女子大学）の諸氏には大変感謝したい。特に武井氏には、表の作成をお手伝いしていただきお礼の言葉もない。大会報告の概要については、笠井雅直「温泉と鉄道—戦前期温泉地間競争と交通網の革新—」『鉄道史学』第29号、2011年12月を参照。

- 2) 『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』大正12年。
- 3) 日本温泉協会『日本温泉大鑑』博文館、昭和16年。すでに、笠井雅直「湯の山温泉と四日市鉄道」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』43-3,2007年において指摘したところである。
- 4) 『昭和三年六月開催 温泉展覧会記録 文部省東京博物館』日本旅行協会、昭和4年、3-4ページ。
- 5) 前掲、『昭和三年六月開催 温泉展覧会記録 文部省東京博物館』、76-77ページ。
- 6) 同上、77ページ。
- 7) 具体的な花巻温泉の宣伝活動については、前掲、笠井雅直「戦前の花巻温泉—観光開発から温泉報国へ—」富士大学地域経済文化研究所『研究年報』第5号を参照。
- 8) 前掲『飯坂湯野温泉』、30、36ページ。
- 9) 『四十年乃歩み』財団法人日本交通公社、昭和27年、28ページ。
- 10) 『ビューロー読本』社団法人日本旅行協会、昭和11年、255ページ。日本温泉協会の設立に関しては、併せて、「創立の経緯」にふれている日本温泉協会『温泉』第10巻第12号、創立10周年記念号、昭和14年12月を参照。なお、同時期の昭和4年8月1日から9月10日まで、日本温泉博覧会が開催されている。「保健衛生」のスローガンの下、主催は、日本温泉協会であり、内務省・鉄道省・逓信省・東京府・東京市の後援となっている。そこでは、遊覧画報を発行する日本遊覧案内社が「温泉案内所」を開設し、「遊覧旅行会」への加入を案内しているが（パンフ「日本温泉案内、中央線・東海道線」日本遊覧案内社）、博覧会の開催そのものに纏わる詳細は不明である。
- 11) 前掲、白幡洋三郎『旅行ノススメ』、43ページ以下。
- 12) 前掲、『ビューロー読本』、523-524ページ。同様の趣旨の下、昭和9年に設立が決定した名古屋観光ホテルは、その建設費を130万円の起債発行によって資金調達しようとしたのであるが、その際「大蔵省預金部ヨリ借入」にあたって（「起債ニ関スル件」）、預金部長と国際観光局長の連名で、名古屋市長あてに次のような文書が出されていた。「国際観光ホテル建設資金融通ノ件 今回国際観光ホテル建設資金トシテ大蔵省預金部資金ヨリ百参拾万円以内ヲ別紙ノ条件及方法ニ依リ融通スルコトニ決定相成候條右御了知相成度此段及通牒候也」（昭和10年2月1日 国際観光ホテル建設資金融通ノ件）」と。さらに、この後、国際観光局長は、「ホテル建築工事ノ設計」「変更」の承認の権限をもち、工事報告、そして「ホテル営業」に関しても「必要アルトキハ」「調査」を実施すること等の権限をもっていた（昭和10年2月8日 国際観光ホテルノ建築及営業ニ関スル件）。（以上の資料は「昭和9年 観光ホテル建設費起債関係書類」に収録されている。名古屋都市市政資料館所蔵）。国際観光局長の果たす役割が知られよう。
- 13) 国民新聞編輯局『温泉日本』啓成社、昭和5年、48ページ。
- 14) 網島定治編纂『日本の国立公園』名古屋新聞販売株式会社、昭和11年、1-2ページ。
- 15) 同上、4ページ。
- 16) 同上、12ページ以下。
- 17) ジャパン・ツーリスト・ビューロー『旅程と費用概算』昭和3年、附録25ページ以下。
- 18) 社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー『遊覧券の栞』昭和8年、4ページ以下。
- 19) 『日本鉄道略年表 昭和17年10月』鉄道省。
- 20) 『大正八年度 鉄道院鉄道統計資料』。
- 21) 以上は、前掲、『日本鉄道略年表 昭和17年10月』。

- 22) 『大正十年度 鉄道省鉄道統計資料』。
- 23) 『大正十四年度 鉄道省鉄道統計資料』。
- 24) 前掲, 『日本鉄道略年表 昭和17年10月』。
- 25) 『昭和元年度 鉄道省鉄道統計資料』。
- 26) 『昭和五年度 鉄道省鉄道統計資料 第一編 運輸 経理 職員』。
- 27) 『昭和八年度 鉄道省鉄道統計資料 第一編 運輸 経理 職員』。
- 28) 『昭和二十一年度 鉄道要覧』運輸省鉄道総局。
- 29) 星野誉夫「小林一三と阪急」中川敬一郎ほか編『近代日本経営史の基礎知識』有斐閣, 昭和49年, 中村青志「小林一三と都市型第三次産業の発展」『マテリアル 日本経営史』有斐閣, 1999年, 中村尚史「第1章 4 郊外宅地開発の開始」粕谷誠・橋川武郎編『日本不動産業史』名古屋大学出版会, 1999年。
- 30) 小川功「我国における観光・遊園施設の発達と私鉄多角経営の端緒」『鉄道史学』第13号, 1994年, 同「電鉄業の多角化」経営史学会編『日本経営史の基礎知識』有斐閣, 2004年。
- 31) 辻本清蔵『撰北温泉誌』大阪活版印刷所, 大正4年, 58, 59, 62 ページ。併せて、『宝塚市史』第三卷, 1977年同, 六卷, 1979年を参照。
- 32) 『宝塚歌劇四十年史』宝塚歌劇団, 昭和29年, 巻末。なお、『阪神急行電鉄二十五年史』(昭和7年)によれば, 明治44年の開業後1か年の入浴者数は45万人, 1日平均1200人であったという(3ページ)。
- 33) 前掲, 辻本清蔵『撰北温泉誌』, 128 ページ。
- 34) 『旅行倶楽部』第二卷八月号, 大正4年8月, 54 ページ。
- 35) 同上, 54-55 ページ。
- 36) 『温泉案内』鉄道院, 大正9年, 54 ページ。
- 37) 森川憲之助『新編日本温泉案内』誠文堂, 大正14年, 296 ページ。
- 38) 松川二郎『大日本百科全集 名勝温泉案内』誠文堂, 昭和9年, 218 ページ。
- 39) 同上, 491 ページ。
- 40) 同上, 222 ページ。
- 41) 『日本名勝旅行辞典』日本旅行会, 昭和6年, 846 ページ。
- 42) 『日本温泉案内 西部篇』大日本雄弁会講談社, 昭和5年, 342, 342 ページ。
- 43) 「宝塚新温泉御案内」阪神急行電鉄株式会社, 昭和9年頃。
- 44) 同上。
- 45) 同上。
- 46) 前掲, 『日本温泉案内 西部篇』, 336, 342 ページ。
- 47) パンフレット『関西の温泉』日本温泉協会関西地方支部, 昭和8年。
- 48) パンフレット「宝塚新温泉設備」阪神急行電鉄株式会社, 昭和9年頃。
- 49) 松川二郎『近畿日帰りの行楽』大文館書店, 昭和10年, パンフレット「六甲・有馬・宝塚廻遊」六甲山ホテル・六甲山阪急食堂。
- 50) 『有馬の名宝』神戸市立博物館, 1998年, 7 ページ。

(未完)